

外交理論家ハロルド・ニコルソンの伝記技術

——自/伝記文学からのモダニズム再考——

松 永 典 子*

The Diplomatic Art of Biography in Harold Nicolson's Works : Modernism Reconsidered from Auto/Biography

MATSUNAGA Noriko

abstract

The diplomatic essays of Harold Nicolson (1886-1968) have been considered classics in the field of International Relations, while his biographical essays and fictions have largely been neglected by English literary critics. In a similar vein, poetry and fiction have dominated as subjects for analysis among the critics of modernism while autobiography and biography have been much less studied. Although the present literary studies largely disregard modernist biography and Nicolson, they were widely discussed and read among their contemporary biographers. For instance Virginia Woolf introduced *Some People* (1927) as a modern biography for the modern world, and appraised the new method that Nicolson created. This article attempts to re-examine modernism in terms of auto/biography, focusing on the new phase of biography Nicolson introduced. His auto/biography, which articulates war experiences as a postwar writing, is here analysed in diplomatic as well as biographical terms. In conclusion, I propose that he reproduce the new imperial citizenship through his new writing. Furthermore this essay also investigates the political unconscious of this period by the examination of biographical essays of Woolf and Sydney Lee as well as of Nicolson.

Key words : biography, Harold Nicolson, Virginia Woolf, Nation, Sydney Lee, citizenship

ハロルド・ニコルソン (1886-1968) の名は、ヴァージニア・ウルフ『オーランドー』(1928)にインスピレーションを与えたヴィタ・サクヴィル＝ウェストの夫として記憶されている。しかし『ポール・ヴェルレーヌ』(1921)、『バイロン』(1924)、『国王ジョージ5世』(1952)の伝記執筆や、『英国伝記の発達』(1927)等の伝記評論において活躍したことについては、今日あまり関心を払われていない。だが如何に伝記作家や伝記評論家としてのニコルソンの作家研究が省みられることは稀有であっても、彼の二つの代表作品——小説『ある人々』(1927)と外交論において古典となった『外交』(c1939)——は、どちらも今なお版を重ね続けている。文学研究者が省みることが稀であっても、前者は「エンターテイメント」小説として¹、後者は外交史研究者の細谷の言葉を借りるなら「おそらく世界で最も広く読まれている外交理論の書」(78)として読まれ続けている。

文学研究においてニコルソンの一連の伝記作品に関心が集まらなかった理由は、本作が発表された時期と無関係ではないだろう。本作発表年の1927年はいわゆるモダニズム作品が次々と発表された時代であった。今日モダニズムというと、圧倒的に詩・小説というジャンルに議論が集中し、モダニズムそのものも狭義にとらえる傾

キーワード：伝記、ハロルド・ニコルソン、ヴァージニア・ウルフ、シドニー・リー、国家、市民

*平成12年度生 比較社会文化学専攻

向があることは否めないⁱⁱ。このような研究動向にあつて伝記文学中心である彼の作品は論じ難かつたと考えられる。しかし今日の文学研究において黙視同然の扱いを受ける本作は、同時代のモダニズム伝記論者たちからも無視されたわけではない。それどころか、後述するように当時はモダニスト伝記作家による〈新しい伝記論〉——すなわちモダニズム伝記論——が大いに議論されていた時代であり、本作品もこの文脈において大いに論じられた。

これら文学研究の趨勢を踏まえ、本稿ではニコルソン『ある人々』を一時的に流行した大衆文学としてだけでなく、世紀末から20世紀初頭にかけて議論された〈新伝記〉の一つの帰結を提示する作品として、とりわけ第一次世界大戦後、国民国家の〈成熟〉に伴う近代外交の変遷期という歴史的文脈から考察し、伝記文学からモダニズムの再考を試みる。

1. 〈新しい伝記〉論

エッセイ「新しい伝記」において、ヴァージニア・ウルフが『ある人々』を書評したのは何ら偶然ではない。『ある人々』5章を1924年に私費発行したのは、ウルフ夫妻が経営するホガース出版だが、ニコルソン曰く「ウルフ夫妻の出版基準からすると良いとはいえない」ため、本そのもののホガースからの出版は断念された。しかし後にニコルソンはそのことを悔やみ、「もし私が良書を書くことがあるなら、彼らのところに渡そう」(149n)と記している。この日記の記述が示しているように、ホガース出版から自著が出版されることを彼は重視していた。出版前に本書を送呈していることのみならず、前述のニコルソンの『英国伝記発達史』はホガース出版から刊行されるなど、ヴァージニアとニコルソンの文学的接点は、彼女のエッセイ題目のとおり、まさしく「新しい伝記」にある。

ウルフの伝記論研究者ローラ・マーカスも指摘するように、1920年代、30年代は、ヴィクトリア朝の伝記に関して疑問が呈された時代であり、伝記が大いに議論された時代であった。その争点を理解する糸口を、「新しい伝記」推進派が批判の矛先を向けたシドニー・リーの『伝記の諸原則』が与えてくれる。

旧世代の伝記評論家リーが伝記において重視するのは、伝記の記念碑的性質である。自身の伝記論を展開する『伝記の諸原則』の中で、「伝記とは、人間の自然本能、すなわち記念碑本能を満たすために存在している」と述べるように、リーにとって「一般的な意味での伝記とは、ある男もしくは女の人物の歴史を後世に伝え残すことであり、永続的にその人物の性格や功績を伝えること」(8)である。また「取るに足らない人物や凡庸な人物の人生では、たとえそれがどんなに文学的な文章で描かれたとしても、それは伝記の原則と相反する」と述べ、伝記の対象を偉人に限定する(10)。そこで書かれるべき人物としてリーが列挙するのは、カエサルやナポレオンといった国家に「貢献」した人物である(9)。

リーが想定する伝記対象は、偉人であるだけでは不十分で、その人物が死亡し、その生命を「完結」(12)していなくてはならなかった。つまりリーの伝記は国家に奉仕するものであり、その実現のためにも伝記対象は伝記作者による位置づけに従属し、沈黙に甘んずる文字通り死者である必要があったと理解される。

なぜ伝記対象を選別する必要があったのか。その理由のひとつとして、新たな読者層の台頭が考えられる。リーにとって人物を記録するという伝記行為は、個人の記憶ではなく集団の記憶を記録することを意味する。「集団の」を「博識の」(encyclopaedic)と換言したうえで、更に「集団」と「国家」(50)という言葉を度重ねて並列して伝記を形容することから、リーが「集団」を「国民」の意味に限定して想定し、なおかつ伝記を国家構成要員つまり国民のための啓蒙(encyclopaedic)手段として考えていたことが推察される。「伝記は一般大衆の目には、ピラミッドや壮麗な御霊屋、彫像や円柱、肖像画や記念建造物のように押し付けがましく映らず、…忘却から記憶を保護する最も安全な方法だ」(8)と述べ、建造物ではなく伝記言語による〈教育〉に価値をおく。このことを1914年までの識字率の上昇と照らし合わせると、リーが想定していた「集団」の姿が徐々に明らかになってくる。1870年以降の一連の教育改革によりもたらされた識字率の上昇は、一部に限られたものではない。低識字率が顕著だった織物業従事者および炭鉱業従事者の値ですら、1914年には前者が100%へ、後者が99%へと飛躍的に伸びているⁱⁱⁱ。さらに大規模な新興読者層が登場したことを裏付けるように1860年代以降マクミラン、ラウトリッジ、ロングマン等の出版社が相次いで少年少女用の読み物を企画出版している^{iv}。言語という知を手にした新読者集

団への教育という課題に対して、リーが出した解答が、伝記である。

しかし壮麗な建造物に含まれる記念的側面をリーが重視しなかったわけではない。「伝記は人間の自然な本能——記念行為——を満たすために存在する」(7)と述べるように、彼は記念行為を重要視する。だからこそ国民が記憶すべき人物を違えず習得するように、国民の記憶の記念碑として伝記を提唱するのだ。リーが主張する伝記とは、国民の統一の普遍的歴史(His-Story)として国家の記念碑に刻まれるに相応しい存在を選別していく伝記に他ならない。こうしてリーが編集主任となった『英国国民の伝記事典』(強調引用者)が完成されたのである。

更にリーの伝記論において特筆すべきは、「公平無私な」視点によって語る存在として、伝記作者の中立性を信じて疑わない点である。伝記作者は歴史学者のように「望遠鏡を通してではなく」、「拡大鏡を通して」伝記対象の構成要素を分析する(27)ことによって、「真実の個性を伝達する」(26)。それがリーの考える伝記作者の仕事である。

〈中立的〉伝記作家が国家の歴史の構築に貢献することを重視するリーに対して、ウルフはそのような歴史——国家に奉仕する歴史——ではなく、そこに描かれる人間の個性を重んじ、故にそれを可能にする技術を重んじる。ウルフは、リーの伝記手法では確かに「花崗岩のように」揺ぎなく確固たる「真実」が築きあげられるが、そのような伝記は「虹のような個性」の輝きを失せさせてしまうと主張する(a149)。リーの真実とは「大英博物館に納められたような真実」であり、それは「きな臭い真実」(a149)でしかなく、それでは人間という「個性」をつかめないとウルフは反論する。「個性が光輝くためには、事実は操ら(manipulate)れねばならない」というのが、ウルフの主張である。結果、その過程において「あるものは、更に輝くようにされねばならないし、影になるものも出てくる。ただし、その過程において、それらの統合性は失われてはならない」(a150)と述べ、伝記執筆者の技巧を重視する。

新旧世代のもう一つの違いは、旧世代(リー)が伝記対象を死者に限定するのに対して、新世代(ウルフ)は生者を対象とすることに価値を見出した点であろう。ウルフは「偉大とは何なのか。小さいとは何なのか」(b125)と、旧世代が伝記対象を限定することに疑問を呈す。伝記対象が死者である限り、作者はその人物の性格・行動の一部を意のままに拡大解釈することが出来る。死人に反論はできない。スザンヌ・ライトが指摘するとおり、新伝記の対象は、「読者・伝記作家・その対象の間には、ある種の平等を想定」(20)し、伝記対象の門戸を生者に開放したのである。ライトが言うように、「[[伝記の]新しい手法は、共同体や民主主義についての新しい考えを物語る」(20)ためにある。〈民主的〉な新伝記が、記録される人物の生死を逆転させたのである。

更なる争点は、奇妙にもウルフがその伝記論の中でその使用を避けた「歴史」という言葉をめぐって議論される。前述の「新しい伝記」でも、エッセイ「伝記の芸術・技術(art)」でも「歴史」という語が用いられていないことから、これはウルフの伝記論における大きな特徴といってよい。リーを含めいずれの伝記論においても必ずといって良いほど言及されている「歴史」という言葉を、ウルフが一切触れていないことを考慮すると、意図的に「歴史」に言及しなかったと考えられる。

現代史学における記憶の問題の扉を開いた歴史学者ピエール・ノラは、「多用で、強大で、集合的で、複数でありまた個別でもある」記憶に対して、歴史とは「すべての者に属するが、また誰のものでもなく、それゆえ普遍的となる使命を持つ」(32)と説明するが、ウルフとリーの伝記における「真実」の違いを、この意味での歴史と記憶から解釈することができるのではないか。国家の歴史を記録するリーの伝記観に対して、伝記作家という一個人による「記憶」の伝記を提唱したのがウルフである。ノラを再度引用すると、記憶という「絶えず変化し、想起と忘却を繰り返す」(a31)ものを扱うからこそ、そのように捕えどころのない記憶を描出する伝記作家の技術がウルフにとって重要となるのである。

この「新しい伝記」技術が顕著になるのが、出来上がった伝記の頁数である。『英国国民の伝記事典』が22巻にも及ぶ分量を誇るのに対して、新伝記作家の一人リットン・ストレイチーの『卓越したヴィクトリア人』はたった一冊にまとめられる。この頁数の違いは新世代から旧世代伝記作家への批判を顕しており、中立なる伝記作者ではなく、技術を駆使する伝記作者の存在の証といえる。芸術作品としての伝記を執筆する伝記作者は、もはや客観的な報告者ではなく、一人の個人として逡巡し、苦悩し、喜び、能動的に伝記の対象に関わり、伝記に記述すべき情報の取捨選択をおこなう存在となる。

同時に、この伝記作者の能動性に注目すると、新伝記の更なる特質が浮かんでくる。伝記作者が作品世界に関

与すればするほど、作品に作者自身が映し出され、自伝要素が強まっていく。つまり伝記は伝記（他者の記録）であると同時に、自伝（自己の記録）とも成り得る。従って「新しい」伝記作家による伝記は、伝記であるだけでなく、自伝であると考えられる。故に伝記の文体、対象、目的だけではなく、それを執筆する伝記作家が議論の中心となるのである。ニコルソンの『ある人々』は、正にヴィクトリア時代の中立的な伝記作家によって執筆される「記念碑的」伝記に対して、新（市民）主権時代に技術を駆使する新しい伝記いわばモダニスト伝記の文脈において、評価されたのである。

2. 知の占有者—『英国伝記発達史』、『外交』

ニコルソンを紹介する際に必ず言及される外交官という肩書きは、国際関係論や外交史では当然言及されるが、文学においては論じられることが少ない。エドモンド・ウィルソンが例外的にニコルソン伝記文学に関して外交（官）という観点から論じているが、分量の少ない書評のためか、問題点を指摘するに留まり、残念ながら十分な考察がなされていない⁴。大戦という時代要素を看過できないモダニズムの文脈において、外交官として第一次大戦の戦後処理に大いに携わり、戦争という国家行事に大いに貢献した外交官ニコルソン自身の〈功績〉を無視することはできない。故にニコルソンの伝記観分析は、『英国伝記発達史』単独で考察されるべきでなく、彼のもう一つの主著『外交』と併せてなされることこそ、彼の伝記論と国家との共謀関係を解明するために意義があると考えられる。

『英国伝記発達史』は、ウォルドー・ダン『英国の伝記』（1916）、アンドレ・モロア『伝記の諸相』（1929）等の20世紀初頭の一連の新しい伝記の研究として位置づけられる。彼の伝記論の特徴は、伝記分野が未確立だった6世紀の聖職者の記録から、彼の同時代に至るまでを年代順に考察し、「純粋な伝記とそうでない伝記を区別すること」（9）ことに主眼がおかれている点である。

英国の「純粋な伝記」を創設するために、ニコルソンが第一に挙げるのは「歴史的眞実」（10）の必要性で、これが伝統的に欠如していることが英国の伝記の特徴かつ欠点だと断定する。「歴史的眞実とは、単に誤った記述をなくすことを意味するだけではなく、完全で正確な肖像を描くような、更に広い意味での眞実性を意味」（10-1）しており、面々と続く伝統はあるが英国伝記にはその眞実性が欠如していると批判する。「伝記が心理学の一部門として総体的に認知されていれば、この科学に備わっている高い基準が伝記に規律や拘束力を付与させていたはず」（12）で、「科学的公正（scientific honesty）を導入すれば、支障や曖昧さがあるために混乱している現状から伝記は解放されるだろう」（12）と主張する。

科学的公正という表現は一見明快なようだが、伝記における科学が何を意味するのか判然としない。この曖昧な指示対象を今日理解するためには、19世紀末から、20世紀初頭に続く伝記における科学言説に目を向けるべきだろう。当時の伝記論は文学であると同時に、人間を解明する科学として考えられていた。伝記は「あらゆる天才を通して、未知なる奇妙な力を、我々の世界にもたらす。伝記作者は、この新しい命を解明する生物学者である」（111）という、性科学者で犯罪学者のハヴェロック・エリスの言葉が示すように、伝記は人間を解剖する科学としてみなされていたのである。エリスに限らず、伝記を文学と言うよりも、科学——とりわけ生物学——の分野として議論する主張は、当時は珍しくなかった。前述のリーの著作においても「伝記とは、中身を分析し、それを構成要素に分解する化学のようなもの」（27）であり、「生物学と人類学という新しく興味深い分野にとって補助的な役割を果たし…人間のタイプを決定する遺伝学に役立つ」（31）と同様の議論が展開されている。一方ニコルソンも「科学的伝記というのは、特化され、技術的なものとなっていこう。…遺伝の影響を研究する伝記が登場する」と記し、ゴルトン、ロンブローソ、エリス、フロイトらのアプローチから伝記を執筆する可能性を示唆する（154-5）。三人の言葉が示唆するように伝記は、優生学・犯罪学・性科学・社会進化論・心理学に〈貢献〉可能な分野として想定され、人間を選別する科学（natural selection）としてみなされていたのである。伝記における科学とは、〈科学的に〉人間を選別することなのだ。

ただしニコルソンは、文学における事実と、科学における事実とを区別する。その違いをニコルソンは以下のように説明する。

科学から向けられた伝記への関心は、文学的関心に対して、敵対するものであり、また究極的には文学

的関心を壊してしまう。科学は事実の重要性を求めるだけでなく、すべての事実を求める。しかし文学は、部分的もしくは一部で全体を代表するような事実を求めているのである。(154)

つまり伝記文学における真実とは、ある一部を抽出して抜き出した真実であり、その抽出には選別作業が不可欠であり、その取捨選択をおこなう人物すなわち伝記における作者の役割の重要性が格段に増してくる、と彼は訴える。前述の科学的公正さを実現するために文学としての伝記作家は、語るべき事実の取捨選択をおこなわねばならないのだ。

ニコルソンの伝記観の二つ目の特徴は、「調和のとれた構成」(12)をもっていることである。それは歴史的眞実という事実を再構成するフィクション性の重視とあってよいだろう。それ故強調されるのがフィクションを制作する伝記作者の技術であるが、その技術は同時に読者に対して自由かつ制限的な読みを与える。ニコルソンは、伝記とは「偶発的」に引き起こされる「好奇心」よりも、「更に複雑な何か」を引き起こすべきだと主張し、それは「共感および同情 (pity) が刺激される」以上のものだと言う(13)。加えて伝記の読者に「事実だけでなく経験」を会得させ、「変化した精神状態」および「創造の意識」を持たせるのが伝記で、「一言で言うなら、伝記とは知の作品 (a work of intelligence)」と要約する(13)。では、この知は誰のものなのか。作者なのか、読者なのか。その答えを導き出してくれるのが、「伝記作者が、姿を現さないことが肝要である」(33)という彼の言葉である。彼の提唱する伝記作者は、ただ姿を現さないばかりでなく、伝記執筆の過程において発見した情報を読者に公開しない(78-9)。それは「公開される情報が制限されることによって、伝記作者が導き出した結論を読者自らが選び取る効果が期待される」からであり、「影響とは対象が曖昧な段階に受けるものであり、明確になってしまうとしばしば拒絶されてしまう」(134(強調引用者))からである。つまり彼の知とは読者の読みを操作するために、作者が手にすべき知なのだ。これと同様の主張は、1934年5月『サタデー・レビュー・リテラチャー』誌に発表されたエッセイ「どのように私は伝記を書くのか」においても明記される。

伝記作家が平均的読者に対してのみならず、作品(伝記)そのものの調和をかき乱すようなセンセーショナルでショッキングな素材を発見した場合、その実際の事実を隠すことは正当化される。(56)

このエッセイが1937年の選集にも掲載されていることから、読者に対する部分公開こそが、読者に影響を与えるのに有効な操作術としてニコルソンが重視した手法だったと解釈できる。部分的な情報公開であるだけでなく、遠隔からの操作技能が伝記作者には求められるということは、リーの「記念碑」のように否が応でも目に付く伝記ではなく、伝記の目的を背後に忍ばせる伝記となるのだ。彼の伝記は、傀儡師ともいべき作者の操作によって、情報が提示されぬまま読者にフィクションとして「複雑な何か」(13)を導き出すために描かれるのである。「知の作品」を掌るのは、伝記作者であり、知はその作者の手中にある。だからこそ読者の読みを操作するニコルソンの伝記作家には、感情よりも知性が求められ、本書で繰り返し強調されるように「対象から距離をもって観察する客観性」(34)が不可欠となる。では『外交』における知は、誰のものか。

1939年に初版が出版された『外交』は、外交の語義を問うことから始まる。ニコルソンは『オックスフォード英語辞典』に依拠して「外交とは…外交官の職務あるいは技術 (art)」(4-5)と定義する。外交という語を、古文書の研究ではなく、現代的な意味、すなわち国際関係の処理に携わる行為もしくは職業の意味で用いたのは、1796年エドモンド・バークであり、この外交官職が政治家と区別され、現代的な意味で確立されたのは、1815年のウィーン会議以降のことであった(11-12)。それ以降20世紀初頭までの時代は「旧外交」と呼び習わされ、この時代の英国における外交とは、ヨーロッパ宮廷文化の名残を多分に継いだ階級的文化的同質集団によって運営されるヨーロッパ外交を意味していた^{vi}。ニコルソンが外務省に入省し(1909-29)、下院議員を務める傍ら本著を執筆したのは1939年で、旧外交から新外交への移行期で、いわゆる「新外交」の幕開けの時代にあたる。それは、細谷によると、パナマ(1901年ヘイ＝ポンスフォード条約)や日本(1902年日英同盟)など、交渉相手がヨーロッパだけでなくアジア・中南米へと拡大した時代であり、また一握りのエリート外交官によって交渉が交わされる秘密外交から、「公開外交」すなわち「民主外交」の時代への移行期でもあった(87)。

このような時代背景を背にしたニコルソンは新旧外交が移行した理由として、〈大衆〉の政治参与を挙げる。とはいえ、彼がこの変化を歓迎したわけではなく、むしろ民主外交における「公開規約」が外交交渉に多分の障害をもたらすと、考えていた(4章2節)。彼は「民主外交に伴う危険の最大の原因が主権者である国民の無責任にある」(46)と非難し、大衆の無知を問題視する。しかしそれより更に「危険」なものが「ある種の大衆の知

識 (knowledge)」（48）だと述べるように、ニコルソンは大衆の教育に消極的である。伝記を通して新興（英国国民）を教育することに熱心だった旧世代の伝記作家と対照的であり、注目に値する。更に正確を期するならば、以下に説明するように、ニコルソンは大衆の教育を否定するのではなく、制限的教育を提唱するのだ。何故か。

「外交」という語は、多年にわたって…古文書の保存、過去の条約の分析および国際交渉史の研究と結びつけられてきた。この科学的であり、この学問的でもある要素は、いやしくも外交機関が有効に機能するためには、今日においても依然重要である。（12（強調引用者））

この引用からも分かるように、ニコルソンの考える外交は古文書の記録および保存と密接な関係をもっている。その古文書保存と蓄積のための専門家が外務省に必須であると説き、「このような歴史や法律についての専門職員がいなければ、先例が無視されたり、正確さを欠いたりすることになりかねないであろう」（12）と主張する。観察者として正確に記述し、記録を保管して蓄積するのがニコルソンの注目する外交官の機能である。

では、いわば外交の知の集大成というべき、この記録を読むのは誰か。選挙民か。確かにニコルソンは「選挙民に分かりやすく必要な事実を提供することは、統治者および専門家の義務」（47）と記している。しかし「普通の選挙民は…無知」で、「自ら進んで [外交] 問題のごく簡単な要素を理解しようという努力などしない」（48）と断定し、これを「民主制度における外交の理論と実践における問題」（53）だとみなす。その解決手段としてニコルソンが提案するのが、彼らの不完全教育である。それは外交問題の詳細情報を与えることではなく、「良識と経験の一般諸原則」の観点から「公衆」を教育すること（53-4）であり、教育というよりも情報の制限というべきものである。注目すべきはここでの諸原則とは、「幾世代にも渡って才能と理性」を兼ね備え人々が発展させてきた「良識と経験」に基づき、「人々が独立国家に居住する限り、常に国家関係を統治してきた」（53）外交官たちによって遵守されてきた国家の原則を示していることである。「理性」と「良識」を兼ね備えているのは外交官であり、彼らが知を占有する限り国家制度の安寧秩序は安泰であり、だからこそ国家の〈平和〉を脅かす公衆に知は与えないのだ。ここに至り、ニコルソンの外交論と伝記論に通底する文体はもはや明白である。いずれも記録者に知を占有させる機能をもち、徹底して新読者市民から知を遮断する。

第一次大戦を境にして、外交も伝記も再編を求められた。特権的知識を占有し、自ら承認し、翻訳し、記述し、新たな市民読者伝達し、記録保存する不可視の、しかし同時に意図をはらんだ結び手としての機能が外交官にも伝記作者にも付与された。以下の最終章においては、その二つの肩書きを有する語り「私」が語るフィクション『ある人々』の考察を通じて、最終的にモダニスト伝記理論家の矛盾点を提示する。

3. モダニスト伝記作家の帰着点——『ある人々』

出版当初から今日に至るまで、様々にジャンル分けされる『ある人々』は^{vii}、九つの短編からなり、各章に題された人物の伝記集である。実在する人物と架空の名前が入り混じっているとはいえ、著者である「私」によって語られる本作は、「私」が外交官の息子から外交官として独り立ちするまでを描いた自伝でもある。著者の書簡によれば、「現実の人間を想像の場に、想像上の人間を現実の場に据えた」フィクションである（50）。いわば第一章で述べたような、自伝と伝記が融合した作品であり、それこそが新時代の新伝記を模索したモダニストが評価した点であった。

ニコルソンは登場人物と彼自身を、まるで現実であり同時にイマジナリーなものとして描く方法を考案したのである。…『ある人々』は、実体、すなわち真実の現実を備えているという点において、フィクションではない。自由すなわちフィクションの芸術性をそなえている点において、伝記ではない。（a152）ウルフは、伝記と自伝の性質を同時に兼ね備える本作をフィクションと現実の二項対立で捉えない「新伝記」として高く評価する。果たしてこの評価は妥当か。その解答を求め、本章ではこの著作の語りを中心に分析する。

『ある人々』は、幼少期の「私」の記憶についての記述から始まる。外交官の父親に伴って中東の大使館（ブタベスト・コンスタンティノーブル・ソフィア・タンジール）で過ごし、後年外交官となる「私」は、中東地域および英国外交（官）の内部事情を知るという意味で二重の現地情報提供者である。外交官の機密保持の職務規定がことさら引用される程（130-1）、彼の証言の希少性が作品中大いに強調される。「こないだまで、私の最初の記憶はロシア南部での鉄道事故のことであった」（1）という一文で始まる本作品は、作者自身の記憶の物語とし

て解釈することができるが、彼の最古の記憶に結びつく空間がテヘランである。冒頭部分ではテヘランという地名は提示されず、ただ「ペルシアからの帰路」と記されるだけであるが、彼の生誕地については徐々に明らかとなり、暗示的にその空間が提示される。同様に終章においても同地が再び言及される。新任地テヘランに向かう途上で知り合ったアメリカ人旅行者からの「どちらのご出身」(hometown)という問いかけに「私」は、「不機嫌になって一瞬なんと返答してよいやら分からなくなる」(166)。この質問にセヴンオークという、妻ヴィタの屋敷を告げるが、実際は彼らが正に向かっているテヘランこそ彼の生まれ故郷(hometown)である。しかもその事実は暗示的に示されるだけでしかない。本作の始まりと終わりの両方に暗示的に同一空間が指し示されると同時に、結末が本作執筆の瞬間という作品冒頭へ空間的時間的に帰還させていることは、自/伝記作者「私」の観点からみると、本作が空間的時間的に反復構造をもっていると解釈できる。

この反復様式をもつ自/伝記の対象となるのが、外交に携わる人々である。ニコルソンの『ある人々』は、生きている人間を対象とし、〈偉人〉(現役英国外務大臣等)ではなく、〈凡人〉(外務大臣の帽子持ち係り等)の名が章題(8章)である点において、新しい伝記の重要な特徴を兼ね備えているといつてよい。しかし各章題にその名を冠する人物は、実際のところ「私」が存在するための背景でしかない。例えば一章では、章題となるニコルソン幼少期のガヴァネスのミス・プリムソールが主要人物として描かれるが、彼女の姿は「当初は非常に鮮明だったが、その後の二年間でなんだかぼんやりとしたものになった」(3)と記され、叙述が進むにつれて、徐々に「茶色のオーラ」(9)で包まれた曖昧な存在となっていく。更にそこでともに生き、声を発し、耳を傾け、必ず存在するはずのテヘランやコンスタンティノープルやブタペストの人々には、名前すら与えられず、言及されることもほとんどない。単に「アルメニア人」(107)とか、「召使たちの足音」(122)とか、「アラブ人の身体」(179)として記されるだけでしかない。本作の伝記対象が死者ではなく生者であるといっても、本作から浮かびあがってくる人物は、外交という「崇高なる」職業に心血を注ぎ、国家のために奉仕する外交官たちのみであり、彼らこそが特筆すべき偉大な人々(Some People)なのである。

これら国民国家に奉仕する外交関係者を、時間的・空間的円環構造をもつ伝記に記すことによって、彼らはニコルソンの作品の中で反復的に存続していく。記念行為(Commemoration)と祝賀行為(cerebration)との違いは、前者が反復的な顕彰行為であるのに対して、後者は一度きりの祝賀行為だと分類したのはノラであるが(b429-30)、正に本作品は、国家に奉仕した外交官の「記念行為」を記録し、〈歴史〉化させる伝記なのである。

4. 結び

新伝記が議論されたのが1920年代だった理由として、マーカスも指摘するように、第一次世界大戦の大量の戦死者を前にして、死という「偉大さ」の指示対象が、一兵卒も含むものへと変化したことが挙げられるだろう(b206)。「偉大な人物の生命だけを記録すれば良いのかどうかということ自体が問題」であり、伝記作家は「我々の価値基準を修正し、我々が賞賛すべき新たな英雄たちを創設すべきである」(b126)というウルフの言葉は、大戦後だからこそ意味をもつ発言といえる。同時にこれは、伝記対象を国民的英雄に限定したりーに対する批判とも考えられる。そして彼女が新伝記作家として称えたニコルソンは、偉人でも死人でもない人物を伝記に描くことで、確かに新たな英雄を創設した。しかし、その代償として、外交理論家ニコルソンは〈知〉を彼らから略奪した。前述したように、新たな伝記対象となった人々すなわち新興市民読者に、情報は全て公開されない。外交官も伝記作者も反論材料となる事実を徹底的に占有し、読者および選挙民に反論の根拠を与えず、情報を非公開とすることによって、彼らに対してある種の遠隔操作をおこなう。更にはニコルソンの伝記フィクションの中に非英国人の具体的な描写が極めて乏しい一方で、それに反比例して偉大な外交官たちが英雄として描かれていることを考慮すれば、ニコルソンの伝記は結局のところ、外交官という官僚制度に根ざした国民国家を〈繁栄〉させる伝記でしかない。ニコルソンが創出した伝記は、ウルフが批判したりーの国民国家に奉仕する記念碑的伝記となら機能面においては変わらず、むしろレトリックに長じて、知を特権的階級に保障する巧妙な手段——知の占有——を進化させたに過ぎない。とするならば、ニコルソンの伝記とは民主化というより、むしろ国民国家に収斂されるものでしかない。この厳然たる事態を見逃したモダニスト伝記作家の再考こそが、私たちに求められている。

* 本稿は、日本英文学会第77回全国大会(2005年5月22日、於日本大学)での研究発表に加筆修正したものである。

註

- i 1984年オックスフォード版の裏表紙。
- ii 例えば Levenson, Michael, ed. *The Cambridge Companion to Modernism* (Cambridge: Cambridge UP, 1999) を例にみても、詩、小説、戯曲、視覚表象が独立した章として論じられているのに対して、独立した章・節として伝記は論じられていない。
- iii 労働者層識字率の上昇については、Sanderson を参照のこと。
- iv Springhall を参照のこと。
- v Wilson, Edmund. "Through the Embassy Window: Harold Nicolson." *Classics and Commercials: A Literary Chronicle of the Forties* (New York: Farrar, Straus and Company, 1951).
- vi 英国在外公館(合計19)は、二つ(ワシントンD.C.とコンスタンティノーブル)を除いてヨーロッパ内にしか設置されなかったことが、英国外交のヨーロッパ中心主義を端的に示している。
- vii ニコルソン研究の最近刊をみると、Rose は「自伝」として、細谷は「人物素描集」すなわち伝記として、それぞれ本作品を分類している。

引用文献

- Ellis, Havelock. "An Open Letter to Biographers." *Selected Essays*. London: J.M. Dent & Sons, Ltd., 1936.
- Lee, Sidney. *Principles of Biography*. The Leslie Stephen Lecture (on 13 May 1911). Cambridge: Cambridge UP, 1911.
- Marcus, Laura a. *Auto/Biographical Discourses: Theory, Criticism, Practice*. Manchester: Manchester UP, 1994.
- b. "Newness of the 'New Biography': Biographical Theory and Practice in the Early Twentieth Century." *Mapping Lives: The Uses of Biography*. Eds. Peter & St Clair France, William. Oxford: Oxford UP, 2002.
- Nicolson, Harold. a. *The Development of English Biography*. Hogarth Lectures on Literature 4. London: The Hogarth P, 1927.
- b. *Diplomacy*. c1939, 1963, 3rd. ed. Washington D. C.: Georgetown UP, 1988. 『外交』 齊藤真他訳(東京: 東京大学出版会、1996年)。
- c. "How I Write Biography." *How Writers Write*. Ed. Nettie S. Tillet. New York: Cornwell, 1937.
- d. *Some People*. Oxford: Oxford UP, 1984, c1927.
- Nicolson, Nigel. *Harold Nicolson: Diaries and Letters 1907-1964*. c1966-68. London: Weidenfeld & Nicolson, 2004.
- Raitt, Suzanne. *Vita and Virginia: The Work and Friendship of V. Sackville-West and Virginia Woolf*. Oxford: Clarendon P, 1993.
- Rose, Norman. *Harold Nicolson*. London: Jonathan Cape, 2005.
- Sanderson, Michael. *Education and Economic Decline in Britain, 1870-1990's*. New Studies in Economic and Social History. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Springhall, John. "Disseminating Impure Literature, the 'Penny Dreadful' Publishing Business since 1860." *Economic History Review*. Vol.47, No.3, 1994.
- Woolf, Virginia a. "The New Biography." *Granite and Rainbow*. New York and London: Harcourt Brace Jovanovich, 1958.
- b. "The Art of Biography." *The Death of the Moth*. London: Hogarth Press, 1981.
- ピエール・ノラ a. 「序論 記憶と歴史のはざまに」長井伸仁訳、記憶の場第1巻『対立: フランス国民意識の文化=社会史』ピエール・ノラ編; 谷川稔監訳、東京: 岩波書店、2002年。
- b. 「コメモラシオンの時代」工藤光一訳、記憶の場第3巻『模索: フランス国民意識の文化=社会史』ピエール・ノラ編; 谷川稔監訳、東京: 岩波書店、2003年。
- 細谷雄一 a. 「大英帝国の外交官たち: 「旧外交」の黄昏—ハロルド・ニコルソン(一)」『外交フォーラム』2003年3月号。
- b. 『大英帝国の外交官』東京: 筑摩書房、2005年。

(2005年12月1日受理)